

2025年度  
**国 語**

2025年3月8日実施  
獣医学部 動物資源科学科

受験番号		氏名	
------	--	----	--

**【注 意 事 項】**

1. 試験監督による解答始めの指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分です。
3. この問題冊子は1ページから29ページまであります。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の所定欄に記入しなさい。
5. 解答は所定欄に濃くはっきりとマークしなさい。その際、ボールペン・サインペン・万年筆等は使用してはならない。その他マークの仕方に関しては、解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。
6. 試験監督の指示により、解答用紙(マークシート)に氏名(フリガナ)および受験番号を記入し、さらに受験番号および志望学科をマークしなさい。
7. 試験監督の指示により、問題冊子にも受験番号および氏名を記入しなさい。
8. 解答用紙(マークシート)は折り曲げたり、メモやチェック等で汚したりしないように注意しなさい。
9. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて試験監督に知らせなさい。
10. 試験終了後、問題冊子と解答用紙(マークシート)はともに机上に置いておくこと。持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の問1～問10に答えなさい。

宇宙はビッグバン以来膨張し続けているということになっている。星と星の間隔はしだいに広がっており、地球から観測すると遠くの星ほど速い速度で後退しているという。もちろんそんなことは肉眼では確かめられない。ビッグバンとか宇宙の膨張とか言うが、しかしそうして広がる宇宙の中心は確定できるのだろうか。中心のない宇宙の「膨張」とはどういうことなのだろう。その昔西洋では、神が万物を創造したことになる。では天地を作り出す前に神は何をしていたのだろうかと教会で尋ねると、そういう罰当たりなことを考える不届き者のために神は地獄をお作りになったのだ、と一喝されたというが、ビッグバンの理論が出てきて以来、(1)宇宙論はますます神学に近づきつつあるように思える。

簡単なことから考えてみよう。光の速度は一秒間に約三〇万キロメートル、地球をだいたい七回半回る速さだ。だとすると、光が太陽から地球まで届くには約八分かかる。ということは、X。だから、たった今太陽が大爆発を起こして不意に消えてしまったとしても、地球では八分経つまでそれに気づかず、日光浴もできることになる。八分経って地球の人間はやっと大慌てするわけだが、もちろんそれでも慌てることに変わりはなく、地球上にいる限りこの時間差は「現実」に何の影響も与えない。けれども、どこか遠くからこの様子を眺める存在がいたとしたら、その光景は彼らには妙に間の抜けたものに映ることだろう。

A、その観察者(もちろん人類ではないが)の位置がたとえば地球から一〇万光年の彼方かなたにあるとして、そこまで光が届いて彼らがこの光景を見るのは一〇万年後なわけで、太陽が消滅してもそれに気づかず、のほほんと日光浴する人類の八分間の笑劇を、一〇万年後にやっと知って笑う連中もつと間が抜けていることになる。そのように相身互いと考えれば、この宇宙にひとを笑いものにする余地はないのだが、空を眺めていて、いま見えているあの星はもうずっと昔にないかもしれないだよ、とあらためて指摘され、ないものをうつと眺めている自分を想像してつい(ア)噴き出してしまったりするのは、人類のかけがえのない美徳だというべきかもしれない。

ところで、「見る」ということほど不思議なこともまたとない。夜空を眺める。そこには広大な宇宙が広がっている(もちろん都会ではなく、空気の澄んだ山の中か、大洋の只中だ)。われわれはこの茫漠ぼうぼくたる広がり、それだけの空間だと思っ眺めている。けれども、満天を彩る星々は、平板に広がっているわけではなく、それぞれに違った方向に、ある星は何万光年、B何億光年の彼方にと距離もばらばらに位置している。そう、「何億光年の彼方」と言う。この規模になると、実は人間の通常の感覚はまったく役に立たず、隔たりも並みの尺度では計ることができない。この桁違いの距離を表現するには、もはや通常の長さの単位は通用せず、光が届くのかかる時間、それも年数で数えることになっている。つまりYということだ。光の速度とは「見える」ことそのものの限界を画する速度だ。空間の隔たりを計るはずの単位が、

その空間を〈見る〉ことの速度に置き換えられる。それでかろうじて表現されるのが宇宙という広がり規模なのだ。だから、われわれと何億光年彼方の星との隔たりは、そう表現される距離でもあるが、同時に時間の経過でもあり、われわれがここで〈見る〉のは、文字どおりそれだけの〈時空〉を隔てた星々の姿なのである。そして、われわれがいま目にするのは、星々のそれだけ昔の姿なのだということだ。

われわれは、目の前に広がっているのが〈現在〉の光景だと思い、これが〈現実〉の宇宙だと思っている。だが実は、見えているのは〈現在〉ではなく〈過去〉なのだ。<sup>(2)</sup>それも一様の過去ではない。距離も方角もばらばらで、とほうもなく隔たったところから、あたかも地球上のこの一点に降り注いでくるかのように到来する〈過去〉の姿だ。ある星々は何万年前の姿をいま見せており、ある銀河は何十億年前の過去をいまここに送り届けている。だから、この星は五万年前、あの星は二千万年前、あの星雲は五〇億年前と、ひとつひとつの星がそれぞれの時、宇宙の時を、まったくアトランダムにここに現出させているのである。夜の海に輝くホタルイカの群のように。

ところで〈現在〉はここにしかない。見ているいまここが〈現在〉だ。そして星々は、その姿を通してここに〈過去〉を現前させている。けれどもいまこの一点に現れ出る〈過去〉とは何だろう。夜空に輝く星々は、過去の痕跡としてわれわれの〈現在〉に浮かび上がっている。〈現在〉に浮かび上がり、現前する〈過去〉とは何か。それはほかでもない、われわれが〈記憶〉と呼ぶものである。満天に広がる〈記憶〉。この夜空の広がり〈記憶〉だとしたら、これは何の、誰の〈記憶〉だというのだろうか。星空は夜にしか姿を現さない。その夜の深い闇に溶け込んで、見上げるわれわれはまるで宇宙に瞳を預けているかのような。それが夜空を〈見る〉ということだとしたら、この〈見る〉ことのうち

に広がるのは、宇宙そのものの〈記憶〉だとは言えないか。この宇宙の内部に見る者がいるとき、はじめてそこに浮かび上がる宇宙の〈記憶〉。そのとき、星空を見るわれわれは何かと言え、いわば宇宙そのものの内的な意識だ。そうやって大げさなら、少なくともみずから記憶などには無頓着な宇宙に代わってそれを意識する、<sup>(3)</sup>宇宙の代理人のようではあるだろう。いずれにせよ、人間もまたまぎれもなく宇宙の一部ではあるのだ。たしかに、宇宙自体は何も想起しない。起こったことは起こり続ける出来事として、宇宙そのものの広がりとして拡散してゆくだけだ。宇宙には自己などというものはなく、いわば生成変化するだけである。時間がその痕跡を空間として広げてゆく。けれどもそこに参照する意識が登場すると、それが純粹な出来事として広がる宇宙を代行して、その感覚(視覚)に宇宙の生成変化を映し出し、散乱展開する時空の様相をその場に〈過去〉として発現させ、〈記憶〉として浮かび上がらせる。宇宙のなかに挿し込まれた鏡、小さな人間の意識とは宇宙にとってそんな装置であるかのような。

ところで、夜空として広がるのが、<sup>(4)</sup>無辺際の宇宙の〈記憶〉の劇場だとするなら、われわれは〈見て〉いるのだろうか、それとも眠っているのだろうか。闇はまぶたの役割を無効にする。真つ暗な闇の中ではまぶたはあつてもなくても変わらないからだ。そして外界の現実を見ることと、夢を見ることにはほとんど区別がなくなる。じっさいそこには、ありもしない星々の過去の姿が、いまこの満天を飾るかのように広が

っており、この意識たる人間どころか、地球すら存在しない時代の数十億年前の光景さえ、あちこちに散らばっているのだ（もちろんそれを見るには望遠鏡が必要だが）。これが「夢の舞台」でなくて何だろうか。その「舞台」に浮かぶ無数の無限に多様な時間の痕跡……。そう言うてよければ、この夜空の広がり、〈現在〉の空間ではなく、闇という見えない〈時間〉の海なのだ。その海が、うねるように、あるいはそれよりはるかにダイナミックに、満天に散乱して波打っている。

〈見る〉ことは、人間の感覚の中で格別の地位を占めている。〈見る〉ことは通常〈知る〉ことと重ねられるように、認識の能力そのものとはほとんど区別なく考えられている。眼は視界を開き、人間を世界の（註）パースペクティブのなかにおく。そのなかで、「見える」ものにはひととはりあえず安心する。「見えない」ことは対象が把握できないだけでなく、自分が定位できないという、たいへん「不安」な事態なのだ。闇は闇を避け、そこに光を投げかけて闇を掃討することを、自分の能力の実現と考えてきた（啓蒙）<sup>（けいもう）</sup> というのはそういうことだ。 D 人

だが、〈見る〉ということは実は限定された能力でしかない。それ自身が不十分だということばかりでなく、視覚そのものが人間の生存領域を限定している。あらためて言うまでもないが、視覚は光がないと役に立たない。その視覚の届く範囲つまり視界は、宇宙に届くことはけっしてない。昼間空を見上げるとき、青空は大気突き抜けているのではなく、逆に大気が宇宙からの光を遮り、乱反射させて青空というシエルターを作っている。そのシエルターのなかではじめて視界は可能になる。光が明るすぎても暗すぎても、視界は成立しないのだ。太陽は目をくらまし、真つ暗な夜には視界はない。

そのようなシエルターなしに視界が成立しないとすれば、「視野が開ける」ということは、このシエルターの内だけを領界としてその外を無視することである。だから（註）〈見る〉という働きを「全知」や「全能」とパラレルに考えるような人間の意識は、成層圏のなかに自閉することで始めて成り立っていると云ってもよい。生物学者なら当然のことと言うだろうが、人間の視覚は生き物としての人間の生存状態の限界に見合っているはずだ。だから〈見る〉という働きは、われわれの昼間の明るみの中でもっともその威力を発揮し、そのことで人間の生存にとって重きをなす。その〈見る〉働きは、宇宙空間のなかでいったどこまで役に立つのだろうか。（註）だいいち、宇宙の〈闇〉は通常の意味での〈空間〉と言うことさえできそうにない。なぜなら、そこに作用しているのは〈時間〉なのだし、その〈時間〉は〈見る〉ことができないのだ。

夜になっても、われわれは見つづける。けれども夜の闇を透して浮かび上がるのは、〈空間〉というより〈時間〉の布置である。それをしも、ひとは「見る」と言い、「星を見ている」と思ってしまう。だからそこにカシオペアやアンドロメダの似姿が、あるいはオリオンとサソリの対峙が見えたりする。つまり夜を「見る」とき、ひとはすでに幻視の世界に入っているものであって、実は「見て」いるのではないのだ。

それをあえて「見よう」とするときどうなるか。（註）「観測」という言葉がある。それは目で見ることではない。レンズを通して集まる光の痕跡をたどることだ。それは闇の中での手探りに近い。目で見るのではなく、触知するのだ。そのようにして闇の広がり触知されるが、その広がり時間は時間そのものではないだろうが、光の移動のうちにたどった時間の影ではある。

（注）パースペクティブ——遠近法。展望。

\*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

（西谷修『理性の探求』岩波書店）

問1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は  ～  。

(ア) 噴き出して

- ① こらえきれずに笑って
- ② おおげさな言葉を発して
- ③ 思わぬ行動をとって
- ④ いたたまれなくなつて
- ⑤ 不平不満を口にして

(イ) 無辺際の

- ① はてしない
- ② はかない
- ③ かつてない
- ④ ままならない
- ⑤ えげつない

(ウ) だいいち

- ① 結局は
- ② まずもつて
- ③ おそらく
- ④ 総じて
- ⑤ まったく

問2 空欄  ～  を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはな

らない。解答番号は A・、B・、C・、D・。

- ① たとえば      ② だが      ③ あるいは      ④ だから      ⑤ もっとも

問3 傍線部(1)「宇宙論はますます神学に近づきつつある」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。その説明として最も適当なもの、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は。

- ① 宇宙はビッグバン以来膨張し続けているとされるが、ビッグバンや宇宙の膨張という現象そのものについても、疑問点が多い。その点に関して、ビッグバン理論は明確な答えを持ち合わせておらず、その信憑性が揺らぎつつあるから。
- ② 宇宙はビッグバン以来膨張し続けているとされるが、それはあくまでも理論上のことであって、肉眼で確かめることは不可能である。そうになると、万物は神によって創造されたという主張も、あなたが間違いでないように思えてくるから。
- ③ 宇宙はビッグバン以来膨張し続けているとされるが、一方で、そのように考えたと齟齬そごが生じる問題が他に出てくる。しかし、そうした疑問を投げかけたとしても、もはや意味のある答えは出そうにもなくなってきたから。
- ④ 宇宙はビッグバン以来膨張し続けていると考えられているが、そうすると逆に、解決できない問題が生じることになる。だが、そのような問題の解決は神に委ねるべきであり、一般には無視して構わないとされるくらいがあるから。
- ⑤ 宇宙はビッグバン以来膨張し続けていると考えられているが、それと同時に、数々の疑問も浮かび上がってくる。だが、そのような疑問は不問に付すのが当然であり、もしそれを問うならば、神の逆鱗じきりに触れることになりかねないから。

問4 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は。

- ① 地球で見る太陽の姿はつねに八分前のものであって、現在ただ今のものではない
- ② 今太陽が存在しているかどうかということは、八分前にすでにわかっている
- ③ 地球で今太陽が見えたとしても、八分前に太陽が存在していたという保証はない
- ④ 八分前に地球に届いた光は、そもそも太陽が発したものでしょうかともわからない
- ⑤ もし太陽から地球を見ることができても、その地球は八分前のものとなる

問 5 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 距離という概念そのものが、成り立たない世界がある
- ② 光の速度を、時間と距離に還元して計測せざるをえない
- ③ 長さの単位が、光が届くぎりぎりの距離として表現される
- ④ 距離が、光の速度を基準に時間に換算されて計られる
- ⑤ 距離というものが、もはや空間では成立しなくなる

問 6 傍線部(2)「それも一様の過去ではない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① われわれが見る宇宙は、距離も方角もばらばらのところにある星や銀河が、あたかも〈現在〉の地球に降り注いでくるかのように見えるだけであり、その中にはすでに存在しないものも含まれているということ。
- ② われわれが〈現在〉地球から見ることのできる宇宙は、今〈現実〉に存在している星や銀河だけでなく、何万光年、何億光年離れたところで〈過去〉に存在した星や銀河から構成されているということ。
- ③ われわれが地球で見ることのできる宇宙に点在する星や銀河は、〈現在〉の〈現実〉というわけではなく、実際は「何億光年の彼方」と表現されるようなとほうもなく離れたところに存在しているということ。
- ④ われわれが普段目にはしている宇宙は、〈過去〉に存在した星や銀河がその姿を現前させたものであり、〈現在〉でもその星や銀河が宇宙のどこかに存在しているかどうかはわからないということ。
- ⑤ われわれが地球で観察することのできる宇宙に点在している星や銀河は〈現在〉のものではなく、すでに〈過去〉のものであり、しかも、それぞれが異なる時空を隔ててその姿を今に現わしているということ。

問 7 傍線部(3)「宇宙の代理人のようではある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 広大な宇宙に生成する出来事の一つ一つは、そのままでは〈過去〉の〈記憶〉と化してしまうが、宇宙の一部としてこの地球に生きるわれわれが、宇宙に代わってそれらを意識することで、出来事は〈現在〉の〈現実〉となるということ。
- ② 宇宙に起こる出来事は、そのままでは〈記憶〉されず、時間の経過とともに拡散していくだけであるが、宇宙の一点を占めるわれわれは、意識をもたない宇宙そのものに代わり、宇宙の出来事を〈過去〉の〈記憶〉として現前させるということ。
- ③ 何万光年、何億光年離れた宇宙の中で起きた出来事は、そのままでは散乱し、消滅するだけだが、地球に生きるわれわれが、それらを〈現在〉の出来事として知覚することによって、宇宙の〈記憶〉が残されることになるということ。
- ④ 生成変化を続ける宇宙に起こる出来事は、そのままでは意識されることもなく、すぐに〈記憶〉となるが、宇宙の一部として地球に生きるわれわれは、宇宙に代わって出来事を〈現在〉起きているものとして意識することができるということ。
- ⑤ 意識をもたず、〈記憶〉に無頓着な宇宙にとっては、〈現在〉の出来事など取るにたらないものだが、宇宙に代わってわれわれが出来事を意識すると、それが広大な宇宙の〈記憶〉が〈現在〉において現前したものであることがわかるということ。

問 8 傍線部(4) 「〈見る〉という働きを『全知』や『全能』とパラレルに考えるような人間の意識は、成層圏のなかに自閉することではじめて成り立っていると言ってもよい」とあるが、筆者はなぜそのようなように考えるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 〈見る〉という働きは、所詮、視覚の届く範囲の中でしか機能せず、見えないものの存在は最初から排除されているから。
- ② 〈見る〉ことができたとしても、その当のものが今現在においても存在しているという保証など、どこにもないから。
- ③ 〈見る〉ということは限定された能力でしかなく、見えていると思っても、それが錯誤である可能性も排除できないから。
- ④ 〈見る〉という働きが威力を発揮するのは、あくまでも空間においてであり、時間をとらえるのは絶対に不可能だから。
- ⑤ 〈見る〉ことのできる対象は、視覚の届く範囲内に限られており、それを補うために人間の知能は存在しているから。

問 9 傍線部(5) 「『観測』という言葉がある」とあるが、「観測」によってとらえることができるのは何であると筆者は考えているか。それを表す本文中の言葉として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① シェルター
- ② 宇宙空間
- ③ 幻視の世界
- ④ 光の痕跡
- ⑤ 時間そのもの

問10 次を示すのは、本文について学習した後に、先生の問題提起をもとに生徒が話し合っている場面である。本文を踏まえた発言として**適当**ではないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

先生——今回の学習で扱った文章では、私たちが宇宙をどのように見ているかということが論じられていましたね。筆者の考えを参考にしながら、みなさんの意見を発表してください。

- ① 生徒A——私は夜空を見上げるのが好きなんですが、今見えている星の光が過去のものだということに驚きました。筆者はその点について、太陽が今爆発しても、地球ではそれと気づかずに日光浴もできるなんて面白い話をしています。夜空でも同じようなことが言えるのではないのでしょうか。私たちは、単純に今ある宇宙を見ているのではないということなのだと思います。
- ② 生徒B——たしかに、星を見ていると、どこかとらえどころのないものを見ているような気がします。それは光年という単位を用いるということにも表れていて、私たちと星の距離はもはや空間の隔たりとしては表現できないほどなのです。だから、光年という時間の単位を用いざるをえないということになったのではないかと、私は考えました。
- ③ 生徒C——Bさんが言う通り、私も星を見ていると不思議な気持ちになることがあります。それは、一面に広がっているように見える星空でも、そこにある星たちが、空間的にも時間的にもばらばらに存在しているからなのかもしれません。そう考えると、私たちが見ているものは現在の現実とは限らないということになります。その点もまた、不思議に感じられます。
- ④ 生徒D——筆者は本文で、人間の視覚の限界についても論じています。私はこの点が重要だと考えました。視覚は人間の感覚の中で特に重視されるものであり、見ることは知ることであるとまで言われるようなところもあります。しかし、筆者は人間が見ることができないのは成層圏というシェルターの内部であって、それを超えて何かを肉眼で見ることができないと指摘しています。

⑤ 生徒E

——私たちが宇宙を眺めているとき、見えているのは実は、長い時間をかけてこの地球に届いた星の姿なのかもしれません。もしそれを観測しようとすれば、星そのものを見るところというよりは、光が移動してきた痕跡をとらえるということになります。一口に宇宙を見ると言っても、さまざまに考えるべきことがあることを今回の学習で知ることができました。

## II 次の文章を読んで、後の問1～問9に答えなさい。

現代のありとあらゆる問題を引き起こしている元ですらある「便利」について検討する時に、(1)生命としての「進化の便利」と、人が意思的に求める「思考の便利」とを、はっきり別のものとして分けて考えなければなりません。生命の進化そのものが便利を求めた結果なのだから、人は便利を求めて当然であるという方向に逃げてしまうと、現代社会の様々な病はいっこうに善くならないからです。

まず、生命が獲得してきた「進化の便利」には常に身体があり、ゆつくりとした時間の流れがあります。長い長い人類の歴史の中で、太陽があり水があり空気があり、気圧があり重力があり地面があつて、時には激変もする環境と折り合いをつけながら、少しずつ進化してきた人体の在りようは、(2)サイボウの一つ一つに到るまで「自然」そのものです。当然、自然に進化してきた我々の身体の「便利」にあつては、いいも悪いもありません。

次に「思考の便利」は、さらに二つの方向で捉える必要があります。一つは、人が明らかに意識的かつ急激に追求した「便利」。もう一つは、人と人との関係の中で必然的に生まれ、徐々に育まれてきた「便利」。

後者の象徴的な例として「言葉」があり、それが可視化された「文字」があります。人間が言葉と文字に至る前までの経緯を想像してみると、喉から発する音の強弱や高低で獲物や危険の有無、求愛すらも伝えようとするうちに、だんだん他人と共有できる声になり、やがて物事を共通認識し、表現する言葉になり、並行して発達してきた絵画表現と言葉が重なり合つて絵文字が生まれ、いつしか現代の文字にまで進化したのです。言葉と文字の「便利」によつて社会が生まれ、民族意識が生まれ、国家が営まれ、都市のインフラが整備されと、人の暮らしのために様々な機能を果してきました。

これに対して前者の「便利」は、生命の進化に近い自然な流れにむしろ逆らうかのようにして、脳で意図的に思考・計画され、現代社会に溢れ返っています。もつとも、人類の重大な革命の一つとされる農業革命以前にも、石器時代にすでに便利な道具の開発は行なわれており、意図的に便利を志向・思考する行為は脳を発達させてきた人類の歴史と共にあつて、そのまま人類が築いてきた文明に深くかかわっている事実は否めません。産業革命ばかりか情報革命をも経た現代社会において、便利に便利を重ねてきた結果、さらなる便利を脳が思考せずにはいられない理由も分からないではないのです。

しかし、現代の「思考の便利」のほとんどが、厄介にも経済活動と結びついて金儲けに利用されている点に問題があります。今や私たちの身の回りは、ビジネスとして提供される便利だらけだと言っても過言ではありません。便利な物の提供は、物を通してコトを提供する豊かな営為であるなどといくら理論武装しようとも、本音の目標は常に前年比を越える販売数であつて、タイ(イ)テイ、そんな理屈は金儲けの建て前に過ぎません。豊かさの指標が文化ではなく経済に偏つたところに人の本能ともとれる便利を求める思考がガツチリ噛み合った形で社会が(注)ドラ

イブされているのです。そしてそれを客観的な輿論よろんではなく、歪められた民主主義と新自由主義から生まれた身勝手な個人主義の総体であるワガママ世論が支えています。意図的に仕込まれて街中に蔓延はびこり、我々の心身に染み込んでしまった無数の「便利」を敢えて疑ってみることは、まるで文明の否定、経済の否定、ひいては人の営みそのものの否定ではないかと誤解されそうで、どこかおかしいと思いつつも触れぬでおく、思考停止しておくのが大方でしょう。「便利」を今さら問い直してみることに自体、容易な業ではないのです。

しかし、いい方法がひとつある。身体を基準に考えるのです。身体を動かさないようにするための便利を貪って暮らしていると、人間はどうなるか。考えてみればすぐに分かる簡単な道理です。身体が衰えれば人は死に向かいます。生き延びるためには、環境の変化に耐えうる柔軟な身体を保っている必要がある。人の輪郭たる身体を基本に捉え直してみると、自ずとこれからの「便利」が見えてくるのではないかと。

見まわせば、現代の便利のほとんどは、いかに身体を使わないで済むようにするか、なのです。そのために考えられた便利が身の回りには溢れています。スイッチひとつで何でもできる。コンビニエンスストアに行きさえすれば、とりあえず必要な物なら何でも手に入る。階段を使わずエレベーターやエスカレーターに乗れば楽である。掃除や洗濯、食器洗いも機械がやってくれる……。人は二足歩行ができるようになり脳が発達し、思考を手に入れたことで、同時に楽することも覚えてしまいました。生活のために頭を使うのは、考える人間の性さがでもある。より早く。より食べやすく。より簡単に。より暖かく。さらに人の営みを善くするために知恵を使うのは、我々に与えられた素晴らしい能力なのです。しかし現代社会では皮肉なことに、その素晴らしい能力ゆえに便利を追い求めたがため、身体的には厄介事が次々に起こってきてしまいました。

少し話が逸れますが、漢字の「楽」の意味を考えてみると、日本では、ラクをする意味の「楽」と、たのしいを意味する「楽」が同じ漢字です。その二つの意味を繋つなげば、ラクをして身体を使わないようにするのは楽しいことだ、となります。元々「楽」とは、木製の柄があり糸飾りの付けられた手鈴の象形で、神様を楽しませるのに使用した楽器であると、(注2) 白川静は『常用字解』で説き明かしています。楽しさに「のんき」の意味が重なり、やがて X のです。人は基本的に楽しいことを好み、生理的にも楽しくしているほうが免疫力さえ上がる事実も分かってきました。便利になるは、楽になるであり、さらにそれが楽しいに繋がってしまうのですから、便利を疑ってみるどころか、人は生来、便利でラクなのが大好きなのです。

しかしながら、ラクで楽しい身体を使わないで済む便利が加速し、そこにもってきてこの飽食の時代です。現代人の身体はどうなっているのでしょうか。肥満、糖尿病、高脂血症など挙げればきりが無いほど、現代病は行動量と反比例して増えてきました。今後ますます身体を使わないう生活に至れば、めくるめくような便利のスピードに、人間の身体の進化はとも追いつけはしないでしょう。一万年なんて単位は無理としても、もっとゆっくりじっくりと、長いスパンで少しずつ変化する社会であればまだしも、現代の便利の猛スピードは、人の身体の自然な進化的

ど全く前提にしていまません。なんとしても、身体を動かすことを前提に便利を思考し直す必要が絶対にあると思えてならないのです。

では、いったいいつ頃から、身体を使わない便利がかくも蔓延ってきたのでしょうか？

よくよく憶い出してみると、ほんのつい最近まで、まだまだ身体を使いながらの便利が生活のそここにありました。例えば、誰もが使うトイレについて――。トイレと下水処理が人間社会にとつてなくてはならないインフラの一つであることを、よほど徹底した自然回帰論者でもない限り、否定する人はまずいないでしょう。しかし、今の便器には用を足した後に肛門を洗うシャワーが備わっているところか、トイレに入ったとたん便器の蓋が自動的に開いて、使用音を目立たなくするための音楽まで鳴るタイプもあります。このまま加速していくと、使用者が男性か女性かを識別して何事か話しかけてくるトイレも出現しそうです。まるで人知を皮肉ったパロディー映画のようですが、放っておけば本気で考える人が出てきかねない。しかも④それが新しいアイデア、つまり付加価値だと思いきんではいる。しかし、便器の蓋が貴重なエネルギーである電気を使用してまで自動で開く必要がどこにあるのでしょうか。自動車の窓の開閉は、スイッチひとつで上下しなくても、手でレバーをくるくる回して開け閉めするのではいけなかったでしょうか。健常者が荷物も持たずにたった一階上へ上がるのにエレベーターを使う必要があるでしょうか。しかも、ここで挙げた例の全てに電気が関わっている。身体に障害がある方や力が弱い方のために必要な機能が備わっているのであれば理解できるのですが、その域を遥かに越えた過剰な便利が急激に増え続けているのです。人は一度便利を覚えてしまうと、なかなか元には戻りません。ところが人は本来、身体を動かすことで環境を把握しながら「自分」の存在やその輪郭を認識してきたのです。このまま過剰な便利が加速すると、「自分」の認識すら希薄になつていくしかなない。⑤身体は自己認識のセンサーでもあるのです。それを蔑ろにして便利を優先する社会が進んでおり、そんな便利のために大量の電気が使われ、原発が必要悪として存在する。これは何かがおかしくないだろうかと思うことが、はたしておかしいのでしょうか。我々の身体に⑥ズクつてしまった便利ウイルスが、見えないところで悪さをしているのではと疑いたくもなるのです。

そして身体のみならず、このウイルスはわが国の培ってきた文化までもボロボロにしていまいました。日本の伝統文化の現状を見てみれば、生活に根付いた手作業による物造りは散々なまでに「便利」に駆逐され、瀕死の状態に追い込まれています。手間ひま掛けて造られる漆器、染色、織り物、和紙、陶芸など挙げればきりがありません。使うために育まれてきた日本の生活道具が、今この瞬間にも次々に消えていく。デザインにも、元来使い易さを多くの人と共有する目的があるので、効率優先の資本主義と技術革新、大多数の意見を取り入れようとする民主主義思想とが相まって大量生産はいよいよ増し、かくも大量に簡単に安く手に入る「便利」を疑うことは、何度でも述べますが、相当の難事です。また同時に、「便利」のメリットも認めざるを得ない。

例えば日本では高度成長初期に洗濯機・冷蔵庫・テレビが三種の神器と呼ばれ、これら「便利」の各家庭への普及により、一日中家事に追われていた主婦にも外出し、仕事に就き、読書をするなどの時間が生まれ、情報が茶の間にいながらにして手に入るようになりました。これは、

ただ単に楽になったのではなく、まさしく生活を一変させるメリットでした。同時にウイルスのごときデメリットも芽生えたのだとしても。

このように考えてみると、実は少し前の時代に、もしかしたらちよいどいい程度の「便利」があったのではないかと思えてくるのです。当時、これでちよいどいいと思わなかったからこそ現在の度外れた「便利」に到ったわけですが、身体を動かし使う観点で遡ってみると、ちよいどよかった「便利」が見つかるのではないか。思うに、それは昭和のある時期にあったのです。高度成長と技術の発展に意識を奪われていて、人体に必須の運動についてなど微塵も考慮せずに、自動で働く便利な物づくりに邁進していたのでしょうか、あの頃の技術はまだまだ発展途上だったために、結果として半自動の「便利」がそこにありました。懐古的にあの頃は良かったと申しあげたいのではなく、半自動の中に Y ように思うのです。半分くらいは身体を働かせていた時代の諸事象を検討し直して、身体を日常生活の中で使う喜びを再発見できるちよいどいい物やサービスを、最新のテクノロジーを活かしつつ改めて提案できないものでしょうか。むろん技術と経済を否定するのではなく、このちよいどいい「便利」に立ち返ることでこれからを考えていく方法が確実にあるはずなのです。

（佐藤卓『塑する思考』新潮社）

（注1）ドライブ——駆動すること。

（注2）白川静——漢文学者、東洋学者（一九一〇—二〇〇六）。

\*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は  ～ 。

(ア) サイボウ

- ① 昆虫をサイシユウする。
- ② 丹念にボンサイを育てる。
- ③ サイシンの注意を払う。
- ④ 貨物をセキサイする。
- ⑤ サイリヨウを逸脱する。

(イ) タイテイ

- ① 制度の不備がロテイする。
- ② テイジ路を右に曲がる。
- ③ 被告人がニユウテイする。
- ④ 誤りをテイセイする。
- ⑤ 空気テイコウが生じる。

(ウ) スくって

- ① 教室がソウゾウしい。
- ② ソウダイな計画を立てる。
- ③ 憲法のソウアンを練る。
- ④ 悪のソウクツと化す。
- ⑤ 事件のソウサに当たる。

問 2 傍線部(1)「生命としての『進化の便利』」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 自然に進化してきた人間の身体に即して生み出されてきた「便利」であり、身体を動かし維持することとは両立する。
- ② 長い時間をかけて環境に適応し、進化してきた人間の身体が求める「便利」であり、産業革命後に具体的に実現された。
- ③ 生命の進化そのものが求めた結果として生み出された「便利」であり、古来、「楽」という漢字で表現されてきた。
- ④ 便利に便利を重ねてきた結果、さらなる便利を身体が求めるようになったために生み出された必然的な「便利」である。
- ⑤ 人と自然、人と人との関係の中で必然的に生まれ、徐々に育まれた「便利」であり、身体を動かすことを前提としている。

問3 傍線部(2)「容易な業ではない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は 5。

- ① ビジネスと密接に結びつき、現代社会にすっかり浸透した「思考の便利」に異を唱えることは、文明や経済を否定し、さらには人為を否定しているとのそしりを不当にも受けることになりかねないから。
- ② いくら現代の「便利」を批判したところで、ビジネスとして提供される「便利」を否定し、コンビニエンスストアもないような生活をすることになれば、人間の身体に悪影響が及ぶことになるから。
- ③ 産業革命を契機として普及し、今では金儲けの口実として用いられるようになった「便利」を批判すれば、便利な物の提供はコトを提供するための豊かな営為であるとの反論を受ける可能性があるから。
- ④ 人間が長い時間をかけて作り上げてきた「進化の便利」をことさらに否定すれば、あたかも現代の文明社会そのものを否定しているかのよう受け取られかねず、無用な誤解を生むことにもなるから。
- ⑤ 歪められた民主主義と、身勝手な個人主義の所産である現代の「便利」を問い直すということは、ともすれば、我々の心身に染み込んでしまった「便利」をすべて否定するという思考停止につながるから。

問4 傍線部(3)「皮肉なことに」とあるが、筆者はどのようなことを皮肉だと考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①

～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 人間は産業革命以来、多くの「便利」を実現してきたが、現代社会ではその限界が見えるようになってしまったこと。
- ② 人間には多くの素晴らしい能力があるにもかかわらず、その能力が過剰な「便利」を求める方向に働いてしまったこと。

- ③ 人間は頭を使って「便利」を追求してきたが、それが実現されると、かえって頭を使わなくなってしまったこと。
- ④ 人間が知恵を使って、生活をより「便利」にした結果、身体にさまざまな問題が生じるようになってしまったこと。
- ⑤ 人間の身体の進化が現代の「便利」に追いつけなくなり、さまざまな生活上の問題を抱えるようになってしまったこと。

問 5 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 人生が享乐的なものになっていく
- ② 怠惰な意味での「楽をする」に至る
- ③ 「便利」と「楽」は袂<sup>たもと</sup>を分かっ
- ④ 楽しさそのものを超克していく
- ⑤ 「楽」としてのあり方を駆逐する

問 6 傍線部（4）「それ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 身体を使いながらの便利な生活
- ② なくてはならないインフラ
- ③ シャワーが備わっている今の便器
- ④ 何事か話しかけてくるトイレ
- ⑤ 人知を皮肉ったパロディー映画

問 7 傍線部（5）「身体は自己認識のセンサーでもある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 人間は身体所作を整えることによって、「自分」という存在やその輪郭を強く意識するようになる。そのような意味で、人間の身体は自己を認識するための手段でもあるということ。

- ② 人間は身体を通して環境とかかわることを通じ、翻って「自分」という存在を把握する。そのような意味で、人間の身体は自己を認識するための装置でもあるということ。
- ③ 人間は身体的な感覚を通して環境から情報を収集し、意図的に「自分」の行動を選択していく。そのような意味で、人間の身体は自己を認識するための基盤でもあるということ。
- ④ 人間は身体を動かすことによって、「自分」という存在の限界を感覚的に理解する。そのような意味で、人間の身体は自己を認識するための契機でもあるということ。
- ⑤ 人間は身体を用いて環境とかかわり、そこから「自分」に関するさまざまな情報を獲得する。そのような意味で、人間の身体は自己を認識するための媒体でもあるということ。

問 8 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 人体に欠かせない運動が適度に備わっていた
- ② 本来の意味での「思考の便利」が隠されていた
- ③ 当時としての新しいアイデアが表れていた
- ④ 人間が避けることのできない必要悪があった
- ⑤ 手仕事によるちよつとした付加価値が存在した

問 9 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は 。  
。

- ア かつて三種の神器と呼ばれた物は「進化の便利」を象徴しており、それ自体はいいとか悪いとか判断されるべきではない。
- イ これからの「便利」のあり方を構想していく上で、昭和のある時期に存在した半自動の物を参照することは有効である。
- ウ 「思考の便利」は、人間が意識的に追求した結果、実現されるものであるという一点においてのみ「進化の便利」とは異なる。
- エ 自然界の変化のスピードを上回るかたちで「思考の便利」が実現されるようになると、逆に人間は思考停止に陥ってしまう。
- オ 現代における「便利」を問い直すに際し、その「便利」が身体の維持と両立するものかどうかを考えることは重要である。

### Ⅲ 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

現代文明の負の部分、すなわち資本の論理の欲望に対して、警鐘を鳴らし続けた人がいた。この世は現代社会のものさしで計るのではなく、人間の原点から見るべきだとする立場である。たとえば(注1)レヴィ・ストロースは、(注2)『現代文明と「未開社会」』の人びとの生活について、最も精通した文化人類学者のひとりといえるが、かれは次のようにいつている。

……オーストラリア、南アメリカ、メラネシア、アフリカにおける綿密な研究が明かしたところでは、彼らにとって稼働人口による一日二ないし四時間の労働で、まだ食糧生産に参加していない子供と、すでに引退した老人を含めた家族全員の生存を確保するには充分なです。現代人が工場やオフィスで費やす時間との、何という違いでしょう。

したがって、彼らを環境の命令に従う奴隷と見なすことはまったくの誤りです。反対に、彼らは、農耕民や牧畜民よりもはるかに環境に依存することが少ないのです。彼らがもちうる余暇は、想像の領域に大きな場を与え、外部世界とのあいだにちょうど緩衝装置のように、信仰、夢想、儀礼などのいわゆる宗教的、芸術的活動を挿入することを可能にしているのです。『レヴィ・ストロース講義』

かつて欧米の列強が、「未開社会」を文明化するという口実で、世界各地をキリスト教化し、植民地政策を推進してきた。もちろん今日では露骨な植民地支配は影をAいるが、文明のグローバル化は、あまねく浸透し、「未開社会」の人びとの生活を破壊し、自然を人工化している。そしてヨーロッパ・アメリカ型文明は、自然や古臭い儀礼をブルドーザーのように押しつぶそうとした。①【】文明社会の現代人もはや、「信仰、夢想、儀礼」などをじっくり考える余裕などなくなっただけでなく、習俗を過去の遺物として葬り去ってきた。それを踏まえてレヴィ・ストロースは、もう一度、辺境の地に残っている自然のなかで暮らしている人間の生活に視線を向けているのである。さらにレヴィ・ストロースは、『悲しき熱帯』の日本版の冒頭メッセージのなかでBなことを述べている。

『悲しき熱帯』を書きながら、人類を脅かす二つの禍——自らの根源を忘れてしまうこと、自らの増殖で破滅すること——を前にして不安を表明してから、やがて半世紀になろうとしています。過去への忠実と、科学と技術がもたらした変革のはざままで、おそらくすべての国のなかで日本だけが、これまである種の均衡を見出すのに成功してきました。

東アジア・モンソン地域の日本人が、自然との共生という思想をもっていたことは事実であるにせよ、また日本が本来は、建築において「自

ら増殖」してきた垂直志向でない水平志向をもっていたといえるにせよ、レヴィ・ストロースが日本文化を過大評価していることは否めない。しかし、<sup>(2)</sup>それを差し引くとしても、ここにはヨーロッパ文明がもたらした負の問題を冷静に観察している目がある。

レヴィ・ストロースのいう「自らの根源」のひとつである自然のなかでの生活が、図式化すれば X。日本の東北、北海道、そして鹿児島、沖縄における過疎の地域にも、自然に根ざした生活が営まれている。さらにそれは、世界各地、すなわちユーラシア、アフリカ、南米、オーストラリアのとくに先住民の生活にも継承されている。いや北米のネイティブ・アメリカンの生活においても認められる。文明化や都市化とはもつとも離れた辺境の地に、「自らの根源」を忘れない人びとの魂が息づいているのである。【 ② 】

文明と未開、「非対称と対称の世界」というパラダイムにおいて、建築もその視野に入ってくる。ヨーロッパやアメリカ社会が推進してきた合理的思考、自然科学万能主義という現代文明と「未開社会」は、建築の分野でいえば、ポストモダンの高層建築と「未開社会」の素朴な原住民の住宅に置き換えられる。このような外見的な非対称性が提起する問題から、反植民地主義、現代文明批判、水平化志向という奥深い思想的意味を問う直すことができるのではなからうか。

この問題に関して<sup>(注2)</sup>黒川紀章は、『新・共生の思想』のなかで、興味深い事例を紹介している。アラブ首長国連邦は石油資源のおかげで、<sup>(イ)</sup>潤沢な資金を投入して住民の住宅建設を推進してきたが、アメリカ人建築家に設計を依頼し、一群のモダンな住宅を建設した。ところが新築した住宅が、まったく住むに C ない状況になっていることを知り、現地調査をした。その際、次のようなコメントを書いている。

建物そのものは、コンクリート二階建てのカリフォルニアに建っているようなアメリカ式の住宅である。全部エア・コンや、ガレージがついている、そういう住宅が砂漠の中にズラツと並んでいる。ところが、近づいてみると、ベドウィンたちは、その脇にテントを建てて住んでいる。住宅のほうには、羊が入っていたり、家畜用のエサを入れていたりする。

砂漠ではエアコンがじゅうぶん機能せず、かつコンクリート住宅は、寒暖の差の激しい砂漠地帯では、風土に合わずとも住めるものではなかったのである。黒川は設計を請け負ったアメリカ人建築家にその状況を報告する。するとかれから「自分も最初から、あの住宅をうまく住みこなしてもらえとは思っていない。しかし、いずれは、発展途上国の人間であれ、ベドウィンであれ、ラクダを自動車に代え、テントを住宅に代えて、近代的な生活をするようになる。だとすれば、なるべく早いうちにそういうことを教えて、ああいう家に住めるように訓練するしかない」という返事だったという。

多くのアメリカ人は現在でも善意であるにせよ、進歩主義の文明史観で、人類はひとつの発展プロセスをたどるはずだと想定していることが

わかる。自分が学んだ近代建築が優れ、ラクダやテントの生活は遅れた文明だと考え、典型的な(3)上から目線の世界観をもっているといえよう。

いまかりに都会に住んでいる人が、イヌイットの冬の生活のなかへ放り込まれたならば、たちまちに困り果て、数日も生き抜くことはできない。【③】逆に砂漠地帯の遊牧民のなかに置かれても、同様な状況が起こりえる。過酷な自然のなかで人びとは、食糧や水の確保、自然に適した住居のつくり方をこころえている。長年培われた生活の知恵なくしては暮らせないのである。この原点に立てば、「未開の生活」を遅れた文明とはいえないし、むしろ Y という認識も生まれてこよう。

日本にこのような文化的落差の問題を当てはめるならば、東京という超高層ビルが林立する大都会と、人口減少に悩む過疎の限界集落という対立図式が想定できる。黒川は同様に『新・共生の思想』のなかで、(4)日本の大都市東京の一極集中を避け、分散を図る具体的な方法があるという。それを可能にするのは、交通網のネットワークだけではなく、第三次産業というべき「情報のネットワーク」でつなぐという構想である。【④】

というのも「工業化社会の主力産業である第二次産業は、資本、生産力、消費力などの集積に依存する部分が大きいため、『吸い上げ効果』が働きやすい」が、通信、文教、サービスなどの第三次産業は、「文化的蓄積に依存するから、小都市の経済も『吸い上げ効果』の犠牲にならない。それどころか、小都市が大都市を大きくリードすることも可能なのだ」と指摘する。

これまで第二次産業が「資本の論理」によって肥大化し、大都市への一極集中化を促進してきたが、これはますます非対称という格差を増大させた。そしてなお進行している D を、第三次産業と情報メディアのネットワークによって、是正しようというのである。黒川はこうして都会と地方の共生を図り、「対称性の社会」を実現させようと問題提起した。

都会の生活が文化的かつ先進的であるという見解は、たしかに偏見に過ぎないのである。文化優位性をふりかざしてみても、高層ビルで生活する先進国の人びとは、スーパーマーケット、機械、電気、石油などがなければお手上げである。【⑤】フクシマの原発事故によって、われわれは放射能だけでなく、停電による都会の機能不全の危機を実感せざるをえなかった。大自然に対する経験や順応力をもっている人が、すなわち大地とともに暮らしてきた人が最後まで生き残る。それぞれの文化が(5)営々と積み重ねてきた生活の知恵や伝統を決して無視してはならない。

このような視点から見れば、ひとつの文明を絶対化することはできず、文明は相対化して理解しなければならぬことがわかる。レヴィ・ストロースがいつているように、文化そのものには優劣がないという、文化相対主義を水平化志向の重要な視点にすべきだと考える。この異文化に対する寛容なスタンスが、現代の多文化社会における衝突を回避し、未来への展望を切り開くための人間の叡智(えいち)ではないだろうか。その意味では、垂直の上から目線ではなく、水平化志向が現代から未来に向けて、(5)世界のあり方を変えていく方策ではないだろうか。

（浜本隆志『「窓」の思想史 日本とヨーロッパの建築表象論』筑摩書房）

（注1）レヴィイストロース——フランスの社会人類学者、民族学者（一九〇八—二〇〇九）。

（注2）黒川紀章——建築家、思想家（一九三四—二〇〇七）。

\*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 1 ～ 3。

(ア) あまねく 1

① 思う存分

② いつの間にか

③ 滞りなく

④ 一瞬のうちに

⑤ 隅々にまで

(イ) 潤沢な 2

① 豊富な

② 理不尽な

③ 過度な

④ 荒唐無稽な

⑤ 大規模な

(ウ) 営々と 3

① 入念にしっかりと

② 休みなくこつこつと

③ 手を抜かずじつくりと

④ 断続的にだんだんと

⑤ 時間をかけてゆつくりと

問2 空欄A～Dを補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 4 ～ 7。

A	④	① ひそめて	② 落として	③ とどめて	④ もたげて	⑤ 閉ざして
B	⑤	① 実用的	② 示唆的	③ 刹那的	④ 神秘的	⑤ 退廃的
C	⑥	① 変えられ	② 逆らえ	③ 堪えられ	④ とらわれ	⑤ 得られ
D	⑦	① アナライズ	② アンバランス	③ アセスメント	④ アクシデント	⑤ アーカイブ

問3 傍線部(1)「現代文明と『未開社会』」とあるが、「未開社会」に関して筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 合理的思考や科学と技術の発展という観点からは、文明社会とは非対称的であり、前近代的な段階にとどまっているが、宗教的、芸術的活動の発展という観点からは、文明社会と対称的であるか、それ以上に発展しており、未開とするのは不適切である。
- ② 一般に文明社会の対概念として用いられる言葉であり、そのために未開と表現されているが、現代文明の負の部分が顕在化し、かつてのような圧倒的な優位性を保てなくなっている現状を考えると、未開という表現もこれから見直されていくことが予想される。
- ③ 反植民地主義、現代文明批判という文脈の中で、文明社会に対するアンチテーゼとして用いられる言葉であり、文明との対立を際立たせるために未開と表現されているが、実際には文明との違いは相対的なレベルにとどまっているため、用語としての適切さを欠く。
- ④ レヴィーストロースがその著書の中で用いるようになった術語であり、かつての植民地や発展途上国を指すが、今ではそのような地域でも開発が行われ、文明的な生活を送ることができるようになってきているため、未開という言葉を用いるのは適切ではない。
- ⑤ 資本の論理にしたがった発展という観点からすれば、現代文明よりは後発の段階にあるが、そこに住む人びとは自らが置かれた環境の中で生きるための文化的伝統と生活の知恵をもっており、その意味では、現代文明よりも劣っているのでも、遅れているのでもない。

問4 傍線部(2)「それを差し引くとしても」を言い換えた表現として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

① レヴィーストロースが過大評価したかどうかはわからないとしても

② レヴィーストロースが過大評価したのは想定外であるとしても

③ レヴィーストロースが過大評価したことは後に問題にするとしても

- ④ レヴィイストロースが過大評価したという点を低く見積もるとしても  
 ⑤ レヴィイストロースが過大評価したとするのは錯誤であるとしても

問 5 空欄  を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 文明と未開の生活様式の違いを際立たせる  
 ② 逆説的にポストモダンとしての様相を帯びる  
 ③ 過去の遺物として扱われることになる  
 ④ 文明化の対極の辺境の地域に残っている  
 ⑤ 洋を隔てた西と東のそれぞれに存在している

問 6 傍線部(3)「上から目線の世界観」とあるが、それは具体的にどのような世界観か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 世界全体はひとつの発展プロセスをたどり、いつか文明化されなければならないのだから、発展の途上にあるベドウィンは、アメリカ的なレベルにいち早く到達できるように努力すべきだという自己中心的な世界観。  
 ② 未開社会に住むベドウィンでも、今では近代的な住宅を建てられるほどになっているので、世界の最先端にいるアメリカ人といえども慢心せず、文明をさらに発展させていかなければならないという進歩主義的な世界観。  
 ③ ベドウィンのような未開の状態に置かれた人びとにも先端的な生活の恩恵をもたらすようにして、西欧文明を全世界に行きわたらせ、アメリカが主体となって水平的な多元世界を実現しなければならぬという世界観。  
 ④ 人類は単一の直線的な発展プロセスの中にあり、アメリカ人はその発展段階において先進的であるのに対し、ベドウィンは遅れた段階にあるので、アメリカ人はベドウィンを教化、啓蒙しなければならぬという世界観。  
 ⑤ アメリカ人は最先端の文明的生活を享受することができているが、その一方で、ベドウィンのような人びとが文明を理解せず、いつまでも未開社会に留まるようなことがあってもやむを得ないという独善的な世界観。

問 7 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 文明と非文明は諸刃の剣の関係にある
- ② 非文明的な生活は反面教師となりかねない
- ③ 近代建築はもはや時代錯誤の存在である
- ④ 文明社会など猫の額ほどのものでしかない
- ⑤ 現代人の超高層ビルは砂上の楼閣である

問 8 傍線部（4）「日本の大都市東京の一極集中」とあるが、このようなことが起きた背景として**適当ではないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 資本や労働力が小都市から大都市へと移動したこと。
- ② 工業化にともない「吸い上げ効果」が働いたこと。
- ③ 交通網と情報網が十分に整備されていなかったこと。
- ④ 「資本の論理」によって第二次産業が肥大化したこと。
- ⑤ 生産や消費に必要な力の集積が大都市で進んだこと。

問 9 傍線部（5）「世界のあり方を変えていく方策」とあるが、それはどのようなものであるべきだと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 近代的な資本の論理に支えられた垂直志向ではなく、これまで「未開社会」とみなされることが多かった国や地域の伝統文化を高く評価する、水平志向をもつものであるべきだと考えている。
- ② 文明と未開の非対称的状况を生んだ垂直的な志向ではなく、世界に存在する多種多様な社会にある文化的伝統を等しく認める、水平的な志向にもとづくものであるべきだと考えている。
- ③ 欧米の文明を絶対視し、それを「未開社会」に垂直的に強制するのではなく、個々の文化を尊重しながら文明を水平的にグローバル化する

ものであるべきだと考えている。

④ 「未開社会」に資本の論理を一方的に押し付ける垂直的なものではなく、世界の各地域で生活する人びとの価値観を積極的に取り入れた、水平的なものであるべきだと考えている。

⑤ 世界に存在するさまざまな文化に垂直的な序列をつけた上で評価するのではなく、相対主義的な世界観にもとづいて、未来を水平的に見通すものであるべきだと考えている。

問10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。解答番号は 。

【しかし今、辺境の人びとの生活は、圧倒的な力をもつ現代文明の前で、存亡の危機に直面している。】

問11 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は

ア 。

ア 日本に関するレヴィ・ストロースの論考は、日本文化の特殊性を肯定的に評価しており、このようなところに、文化相対主義の率先垂範的な実践を見て取ることができる。

イ かつて欧米の列強が文明の世界化を図り、「未開社会」のキリスト教化を推進したのは、文明と未開の非対称というパラダイムを克服し水平的な世界を生み出すためであった。

ウ それぞれの文化が育んできた生活の知恵や伝統を無視し、文明社会の論理を一方的に押し付けることは、多文化社会における衝突を回避するためにも、あつてはならない。

エ 黒川紀章によれば、日本の東京一極集中を避け、「対称性の社会」を実現させるためには、東京に集積した資本を吸い上げて地方へと再分配するのが最も有効であるとされている。

オ 都会の住民がイヌイットの冬の世界に放り込まれば生きていけないことからわかる通り、それぞれの社会には、環境に適応して生活していくための知恵が存在している。